

六 花



2011 平成23年
俳句雑誌りっか

7月号

Cover designed by Little Bird

田に下^{くだ}る水音豊か螢の夜

螢火にひととき酔うて戻橋

時鳥名告に裏戸開けてあり

遠き灯や夜風の押せる葭簾

牛蛙大きく息を呑み込みぬ

片脚の遅れて出たる臺

雨蛙干しある傘に呆けをり

湯を引ける筒なほ進む蝸牛

水音に暮れ残りたる山法師

夕青し糸瓜の曲り初めたるは

じぐざくに蜻蛉を追ふとんぼかな

木の幹の捻り出したる梅雨茸

皇后の碑にでで虫のかたつむる

浮亀を吹き寄せてくる風涼し

漂うて萍となる真昼かな

父在りし書架を見てをり昼寢覚

黒南風に鴉は羽根を抜き捨てし

小半時金縛なる虻と吾

夕荒に鍛へられゐる早苗かな

蟻小さし妻に隠れてやる砂糖

結末に揺るぎなどなし余苗

紐をひくごとく消えけり蟻の列

膨らんでへこんで蟻の流れけり

亀の鼻さざ波生める梅雨の明

螢指す爪のほのかに見えにけり

梅雨明や引越してゆくメロンちゃん

根付きたる早苗の音を聞いてをり

梅雨明や風より高く蝶のとび

白南風の草に縋りてゐたる蝶

梅雨明の風いら草を裏返す

一条の縄ともならで蛇乾く

白南風に亀の鼻先溺るるよ

空^{うっ}貝^{がい}の漂^うてゐる大旱

あめんぼう斜め走りに遡る

微塵子のびつしり田水沸かしけり

田の縁^へに萍^へばり付きゐたる

羽繕ふ形に病みゐる春の鴨

笹村政子

はづくろふなりにやみいるはるのかも ささむら まさこ

蒼穹のいよいよ深し初桜

春耕のはじめの一打天を搔く

鷺の巢の底を日差しの抜けてをり

花冷や母に月日のまたたくま

北方へ帰れなかった鴨が水辺でうごめいている。鴨は羽を繕っているように見えたがそうではない。羽根を自在に動かすことが出来ず、苦しみ、のたうち回っている姿だった。春になって北国へ仲間と共に帰ってゆくことが出来ず、取り残された鴨。その上見守ってくれる仲間も居ない水辺で病気か怪我の苦しみに耐えている。野生の動物は病気や怪我は死に直結する。その苦しそうな姿がいつそう哀れをさそう。その哀れさを感情を表に出した主観の句にせず、羽根を繕っているような形だと客観的に言い止めたからこそ、一層哀れさが出た作品になった。

つつじ

梶浦玲良子

森ひかる真夜白妙の桃の花
翅錆びし紋白の来る畳かな
逃げ水の逃げおはせたるにじり口
節分の夜や喚声の戻り舟
土器かわらけを力まず投げるつつじかな

二十面相

貝森 光洋

人生は一度限りのしゃぼん玉
山を焼く頭に攻防図をたたき込み
青々と五月の息して大櫂
二十面相真つ赤な口か赤腹か
何処までも淋しき影なり蝸牛

せつじゆしゆう
雪樹集

春の鯉

永田万年青

一畝を打返したる熱き息
麗らかや櫓に雲のとどまりて
ゆるゆると滲みて現るる春の鯉
花筏 鯉の現れ崩しけり
花びらの鯉の背に乗り逆上がる

雪柳

池崎るり子

雪柳風になびきてお辞儀せり
三^{さん}彼^か処^{しこ}ひとかたまりに雪柳
花冷やいつもの坂を引返し
石段を上がりて落葉拾ひけり
色とりどり神戸祭に春の蝶

蛍雪譚 六甲

翅錆びし紋白の来る豊かな

梶浦玲良子

翅が錆びるといふのは紋白蝶の翅が変色または綻びていることを指すのだろう。錆びるは寂びるであり荒びると同源。何処か疲れ果てた感じのする蝶々である。しかも白さを誇る紋白蝶であるから余計にそのような目をもつて見てしまうのであろう。その荒んだ紋白蝶が畳の上に来て休んでいる。その姿を見ているとどこか自らを投影しているような気分になるのである。か。などと様々なことを読者に語りかける。同時作「土器を力まず投げるつつじかな」は土器投げとつつじの取り合わせで、つつじの見事に咲いてる谷に向かって土器を投じている気持ちよさを詠んだ。「逃げ水の逃げおはせたるにじり口」の作品は玲良子さん独特の表現方法で魅力はあるが主観が強いで句を難解にしているのが惜しい。「森ひかる真夜白妙の桃の花」は桃の花の咲いた森が白妙のようであるというのが幻想的な比喩として面白い。が、ずしんと読者に響いてこないのは「森ひかる」に連なる表現が美しい上に美しさを重ねたからではないだろうか。

六花集

く雨月新青
くだ見緑蛙
りれ草を葉
猿を硝風陰
軒昼子かか
に寝コきら
春のツ分空
雨子プく仰
止守にる宮ぎ
む歌開る宮ぎ
をととき宮ぎ
待聞く参け
つくるりり

加納
淳子

水夜水透恋
音を待綾通
のち天る尻
時き井春く
々蒲公ありの
太公英掘水刺
く掘り水草身
春にゆ生か
のゆ生か入
川くふなる

田尻
勝子

桜海桜冷落
薬光散ゆる椿
殉のるる容
ずさあ日の
るさふの
ござる翳ま
となる濃ま
とみ水か
く立のり
降りてごとく
にりく桜
け春なか
り夕りなり

藤井
昇三